
まって

EARTH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まって

【Nコード】

N0286P

【作者名】

EARTH

【あらすじ】

現代は競争社会、最近は塾がとて多くなった、と、いうことで全国の塾の生徒を戦わせ半分ほどに減らそうと、政府は考えた。

アドバイスとかくれると嬉しいです。

人物紹介

とうがいじゅく
冬崖塾

紅チーム

主人公

五月雨
真澄
さみだれますみ

女子

たなべかな

田邊香奈

きさらぎわつき

如月和月

あおばつぼみ

青葉蕾

まるいさくら

丸井桜

男子

みかみしん

魅神晋

やざわひばり

矢澤雲雀

のだゆうすけ

野田優介

ふじわらすすむ

藤原進

はやみぜんじろう

速水善次郎

さかのじゅく
嵯峨野塾

白チーム

女子

よこたみどり

横田翠

おがわあい

緒河愛

ばばまき

馬場真北

あかさからいく

赤坂雷玖

くまもと なみ
熊本菜巳

男子

しかの いくみ
鹿野郁美

さかい ざん

阪井 斬

ろっかく し のぶ

六角 忍

はさまた いち

峡太 一

さるすべり ん
百日紅凜

主催者

おに ずか
鬼塚

人物紹介（後書き）

紅チームも白チームも全員小6です。

はじめまして

その日はカラッとした晴天だった。
ただ、私の心には深い霧が立ち込めた。

「みなさん今日は夏休みの特訓に来てくれてありがとうございます、
しかし夏の特訓というのはやはり勉強だけではありません
と、いうことでいまからみなさんから九名、殺し合いに行ってもら
います」

くじ引きだった。

うちの塾はみんなで十八人だから0～17の番号を書いた紙をティ
ッシュの空き箱に四つ折りで入れ、

偶数をひいた人がアタリ、さらに0をひくと大当たりだ、殺し合う
ために選ばれたチーム（先生は騎士団きしだんという）のリーダーになれる
そうさ。

「真澄ますみ、やだね、殺し合いなんて…」

くじをひく順番に並んでいる時、私の後ろに並んだ親友の鹿鳴館麗ろくめいかんうらら
は少し乾いた唇を
赤い下で舐めながら言った。ちなみに順番は成績順になっている。

「まーね…」

濁った空気に言葉を溶かす。そのとき、

「うわああああ!？」

キンとした叫びが狭い教室に響き渡った。

「桜……」

幼馴染で学校も一緒に桜が第1の犠牲になったようだ。
あまり好きなやつじゃないけどでも……桜

「なんでっ……俺があ……」

「嘘だろ、なあ！」

他の女子からも人気のある矢澤雲雀^{やざわひばり}もムードメーカーの野田優介も、
とても力が強くて男勝りだけど優しい香奈^{かな}も……
どんどん騎士団に……。

私の番が回ってきた。

どきん

どきん

どきん

体の中のメトロノームがやけにうるさい。

かっとな全身が熱くなる。

——カサッ

紙を開く

どきん

『5番』

よ…よかった

私は心底安心した、と、瞬きした瞬間。

「やったーうらら奇数く！5番く！」

手の中にはバカらしい0の文字があった。

騎士団 nowing

「それじゃあ騎士団のリーダーは五月雨真澄で、
他のメンバーは、

女子、

たなべかな

田邊香奈

きさらぎわつき

如月和月

あおばつぼみ

青葉蕾

まるいさくら

丸井桜

男子は、

みかみしん

魅神晋

やさわひばり

矢澤雲雀

のだゆうすけ

野田優介

ふじわらすむ

藤原進

はやみせんじろう

速水善次郎

だな。

じゃあ真澄、あとはまかせる…

補欠のの9名！勉強にもどれ！」

無責任な大人たちはこうして私たち9名を残していった。

「ねえ…」

「俺たちこれから…」

「死んじまうんだ、こんなに若いのに」

「ずるいずるいずるい！私たち」

ざわざわと、恐怖や不安が自身を侵食していくのを…

いや、自分だけではない、自分よりもさらに、他の全員が闇にのまれていくのを真澄は感じ取っていた。

「静かにして！」

泣き声や不満の中、凜とした真澄の声はよく通った。

「今からっ：今から私の言ったことは絶対だ、戦う、それだけだ、そしてこの騎士団を騎士団きしだんナウイングnowingとする！」

私は死にたくない。

生まれた意味

「おい、調子のってんじゃねーよ！」

ひとり、私をにらんだ奴がいた。

「なに、進」

みんな諦めている、だから私には逆らえない：
今は好都合だった。

しかし世界にはいろいろな人間がいらっしやる。

「きこえねえのか！へっ！バカみてゝ」

「そうだそうだ」

そしてそんなのに煽られ（あおられ）便乗するやつがいる。

困った。

「やめろ」

低い、威圧感のある声、

「怖いのはお前だけじゃない。俺は五月雨にとことんつきあう」

それはこの塾の男子のボスである魅神晋だった。

「わっ…私も」

「あたしも」

「僕…も」

そしてどんどんすがるような眼をした友達が教室の中心に集まった。

「ありがと、晋、みんな、生きる気があるやつだけ来て、私の話をきいて」

全員集まった。

「うん、じゃあ私の考えを話すよ」

みんな必死に聞いてくれた。

私はうまくいけばみんな助かること、

自分が生きるためには人を殺さなければいけないこと。

信じてくれた事にとっても感謝してること。

「ねえ、でも何人かは…」

「うん死ぬかも、でもいつも自分を第一に考えて、

絶対見失わないで。ナウイング nowingは…

翼がないノーウイング nowing

行動するナウイング nowing

つまり希望無き行動者って意味だから。

生まれた意味を見失わないでね、ok?」

「アイサー!」

「了解」

「ok!」

「てかさ、アイサーって古くない?」

「あははは！」

ひさしぶりに笑顔を見た気がする。

それほど9人が背負ったものは大き過ぎたのかもしれない。

誰が死んだって私は生きる。心臓は動く、息してごはんを食べて

それでいい。責任感や罪悪感なんてそっと胸の奥にしまっておく…

今は。

生きたい、逝きたくはない。

生まれた意味（後書き）

「鬼塚様^{おにつか}いまのところどうですか？」

「ウン、オモシロクなりそうだねえ★

あの真澄ってコ特に僕の好みだなあ★」

「そうですか第1回ですからね、気を引き締めていきましょう。」

出発

——ガチャ

「準備はいいか」

ドアを開けついこの前までの大好きだった先生だったはずの人が入ってきた。

そうか、先生も泣きたいし不安だし、怖いんだね
言ってしまいそうになった。

喉まできた言葉を唾と涙とで溶かして飲みこんだ。
盗聴器とかきつとあると思うから。苦しい。なにかが。

「うん」

「はい」

「みんな大丈夫です」

九人全員の眼はもう諦めてなかった。

「じゃあ行こう」

真澄は力強くうなづいた。

もう戻ってこれないかもしれない教室を騎士団 nowing は後に
した。

ありがとう

「ついたぞ」

歩いた、かるく3キロほど。そしてオレンジ色の建物のまえについた。

だが息をあげる者は誰一人いない。

いや、先生だけはあはあ言っていた。

「まったく：先生だらしないっ！そんなんだから女の一つもできないの！

一回くらい二股してみなよ」

「そーそ」

「うるさい」

いつもの雰囲気、ほんのり先生の白い顔に華が咲いた。

「じゃーね、ありがとう先生！」

「ばいばい…」

「がんばれ！独身！」

「あ…おい！担当教師がついていくことをまだもう少し許されてるんだぞ！」

「もーいい！」

そんなやりとりをして真澄は一番最後に建物の敷居をまたいだ。

「だいすき！ありがとうございます」

そして深々とお辞儀をするとドアを閉めようした。

「まて！」

「ん？」

——ひゅっ

「使えるはずだそれもって行っ来い：ありがとう」

先生の手から投げられたそれは特殊なライトを当てないと読めない透明ペンと手帳九つだった。

丁寧にそれぞれの名前を書いてあって少し笑った。

「真澄」

「ああ、善次郎：これみんなに配つといて、先生から。
あと伝言。『記すべきものは記されてる』よろしく」
「わかった。」

心配そうな瞳が私を映す。

「ふふ：一緒に息をしてようね」

にっこり笑いあった。

「ああ」

問9.

「初めまして★冬崖塾^{とうが}、嵯峨野塾^{さがの}の子供たち★ボクは鬼塚といいます★

今からゲームのルール説明をするから、良く聞いて★」

うざい

なんかどこかの安っぽい政治家の公演のような感じにパイプ椅子が並んでいて

そこに嵯峨野…塾？の絶望に満たされた生徒九人と悲しい顔をした大人が座っていた。

その近くに私達九人は座る。

すると語尾にやたら★をつけたがる鬼塚という奴が出てきた。

「はあゝいそれじゃあまずはおゝチーム発表★冬崖塾紅チーム、嵯峨野塾白チームだよ★

それでゝちよつとみなさんに筆記試験をしてもらいます★

まあ各チームに用紙を配るからガンバって★

それじゃあ一時間後★」

いつの間にか真澄の手には一枚の紙がのっかっていた。

そして鬼塚がついさっきいたところへ視線をよこすと、すっかり気配も消していた。

「集合！」

私は号令をかけた。

「いまからみんなで解くよ、問題は全部で九つ」

「一人頭一問だな。」

晋が言った。

「よし、俺が問題を振りわけろ…」

真澄には最後の問題が回ってきた。

ゆっくりと問題文を読む。

「ねえ、みんな、計算間違いとか、記入漏れない？」

最初の八問はだいたい塾で習ったりした、少し難易度の高い問題だった。

「うん」

和月が強い目で言った。

大丈夫だ、真澄は直感的にそう思った。

もう一度私はみんなが繋いだプリントに視線を落とした。

薄々気づいていたが、アンカーのソレは今までの問題と比べると明らかに異質だった。

問い9・次の問題に答えなさい。

『死ぬとはなにか』 死、や殺すなどを使わず一言で表現しなさい。

私はすぐに答えを書いた。

A・どうせ自動でくる終わり

そしてプリントを裏向けた。

———ジリリリリ！

少しして煩い良く聞くようなベルが鳴る。

すると鬼塚がニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべながらどこからか出てきた。

「ホント…あやしいやつだな…」

私がつぶやくと8人は頭を重く振った。

「そこ、なにやってるの★ま、関係ない話ならやめたほうがイイかもね★

…それより、みんなできたカナ★じゃあ採点するから代表…ってこの場合先生かな？は

ボクにプリント持ってきてネ★」

鬼塚は挑発的な笑みで私を見てきた。

それをウインクで返すと、めんどくさいので眼をそらした。

そしてプリントを鬼塚に渡しに行く。

今、私には今更な疑問がある。

いったい手にしているプリントにはなんの意味があるのか…？

真澄は小さくため息を漏らした。

イライラ

あれから少しして採点が終わったプリントが、軍人っぽい人から私の手に戻ってきた。

「ありがとう」

無表情のそいつからプリントを受けとると、すぐに点数に気がいった。

結果——9999点、コメント——おいしい★期待してるよ★

「どうだった？」

桜が横から覗き込んできた。

「ん、これみんなのところに持ってた。」

じっくりと見たそうな顔をしていたので、プリントを渡してやると、すぐさま食いつくように見ていた。

「さつてと…」

よっころしょっと重い腰をあげて鬼塚の方に向かった。

どうやら呼びのようだ。

私の勘がそう告げていた。

「よくわかったね★」

「勘よ」

鬼塚のところまでいくと、案の定鬼塚は嬉しそうに笑って私を舞台の上手へむかえいれた。

「ようこそ★まあ、まずなんでテストをキミタチに受けてもらったかというと、キミタチのテストのポイントで戦いに使う武器や備品を買ってもらうためなんだ★」

あー、そうなんだ。

きもちわるいほど紅いソファーにどっこいしょっと座った鬼塚は、私にも向かいに座るように勧めた。

「座りなよ★」

ニヤツと黄色い歯を覗かせていやらしく笑う鬼塚に、私もニヤツとしてどっかり机を挟んで向かい側に座った。

「ククッ★ちなみにテストは10000点満点だよ★キミタチは完璧な回答だった★けど満点あげちゃ面白くないだろ★」

このやろう…!!

ちょっとイラッとして、一瞬殺意が沸いたたが、それは後々の為にとっておかないといけない。ということでなんとか自制してむりやりニッコリと笑顔を顔面に貼り付けた。

「口の端がひきつってるよ★」

「…」

「かわいい…★ああ、いけないいけない★今から三時間、ボクが渡すプリントに目を通して、ポイントで買う物も発注ボードにかきこんでもらうよ★勿論その後すぐにバトルしてもらおうから…★まあ、詳しいことはいわないほうが面白いから言わないでおくよ★せいぜいプリントをじっくりとよんでがんばって★」

そう言うとき鬼塚は、私にペンとホワイトボード、ホッチキスでとめられた数枚のプリントをだしてきて渡した。

「さあ、もういいよ★」

鬼塚は私が来たときとはうってかわって、鬱陶しいというように右手で私にしっしっ、とやったので、とてもイライラしてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286p/>

まって

2011年10月7日16時36分発行